昭和文學全集

川端康成集

昭和二十八年三月一日　初版印刷
昭和二十八年三月十日　初版發行

昭和文學全集9
川端康成集

著作者　川端康成
發行者　角川源義
印刷者　村尾一雄
東京都新宿區市谷加賀町一ノ一二

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七
角川書店
振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙　本州製紙株式會社
クロース　日本クロス工業株式會社
印刷所　大日本印刷株式會社

★★★

川端康成集

昭和文學全集
角川書店版

目次

卷頭寫眞

筆蹟

雪國　七

伊豆の踊子　三七

禽獸　六九

虹　七九

舞姫

皇居の堀　一〇〇

母の子父の子　一〇九

寢ざめ目ざめ　一二〇

冬の湖　一三三

愛する力　一四三

山のかなた　一五四

佛界と魔界　一六六

深い過去　一七六

名人　一八六

千羽鶴

千羽鶴　二三七

森の夕日　二四九

繪志野　二五七

母の口紅　二六五

二重星　二七四

山の音

山の音　二八七

蟬の羽　二九三

雲の炎　三〇〇

栗の實　三〇五

島の夢　三一四

冬の櫻　三二一

朝の水　三二八

夜の聲　三三四

春の鐘　三四一

鳥の家　三四八

都の苑　三五五

傷の後　三六三

解說　伊藤整　三七〇

年譜　三七五

www.libtool.com.cn 仅供学术研究使用 www.elibrary.com.cn

川端康成集

初雪よ鶴子
物舞の幻の
大東亜戦争

雪國

國境の長いトンネルを抜けると雪國であつた。夜の底が白くなつた。信號所に汽車が止まつた。

向側の座席から娘が立つて來て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷氣が流れこんだ。娘は窓いつぱいに乘り出して、遠くへ叫ぶやうに、

「驛長さあん、驛長さあん。」

明りをさげてゆつくり雪を踏んで來た男は、襟卷で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れてゐた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鐵道の官舍らしいバラックが山裾に寒々と散らばつてゐるだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に呑まれてゐた。

「驛長さん、私です、御機嫌よろしうございます。」

「ああ、葉子さんぢやないか。お歸りかい。また寒くなつたよ。」

「弟が今度こちらに勤めさせていただいてをりますのですつてね。お世話さまですわ。」

「こんなところ、今に寂しくて參るだらうよ。若いのに可哀想だな。」

「ほんの子供ですから、驛長さんからよく教へてやつていただいて、よろしくお願ひいたしますわ。」

「よろしい。元氣で働いてるよ。これからいそがしくなる。去年は大雪だつたよ。よく雪崩れてね、汽車が立往生するんで、村も焚出しがいそがしかつたよ。」

「驛長さんずゐぶん厚着に見えますわ。弟の手紙には、まだチヨツキも着てゐないやうなことを書いてありましたけれど。」

「私は着物を四枚重ねだ。若い者は寒いと酒ばかり飲んでゐるよ。それでごろごろあすこにぶつ倒れてるのさ、風邪をひいてね。」

驛長は官舍の方へ手の明りを振り向けた。

「弟もお酒をいただきますでせうか。」

「いや。」

「驛長さんもうお歸りですの？」

「私は怪我をして、醫者に通つてるんだ。」

「まあ、いけませんわ。」

和服に外套の驛長は寒い立話をさつさと切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら、

「それぢやまあ大事にいらつしやい。」

「驛長さん、弟は今出てをりませんの？」と、葉子は雪の上を目捜しして、

「驛長さん、弟をよく見てやつて、お願ひです。」

悲しいほど美しい聲であつた。高い響きのまま夜の雪から木魂して來さうだつた。

汽車が動き出しても、彼女は窓から胸を入れなかつた。さうして線路の下を歩いてゐる驛長に追ひつくと、

「驛長さあん、今度の休みの日に家へお歸りつて、弟に言つてやつて下さあい。」

「はあい。」と、驛長が聲を張りあげた。

葉子は窓をしめて、赤らんだ頰に兩手をあてた。

ラツセルを三臺備へて雪を待つ、國境の山であつた。トンネルの南北から、電力による雪崩報知線が通じた。除雪人夫延人員五千名に加へて消防組青年團の延人員二千名の出動の手配がもう整つてゐた。

そのやうな、やがて雪に埋れる鐵道信號所に、葉子といふ娘の弟がこの冬から勤めてゐるのだと分ると、島村は一層彼女に興味を強めた。

しかし、ここで「娘」と言ふのは、島村にさう見えたからであつて、連れの男が彼女のなんであるか、無論島村の知るはずはなかつた。二人のしぐさは夫婦じみてゐたけれども、男は明らかに病人だつた。病人相手ではつい男女の隔てがゆるみ、まめまめしく世話すればするほど、夫婦じみて見えるものだ。實際また自分より年上の男をいたはる女の幼い母ぶりは、遠目に夫婦とも思はれよう。

島村は彼女一人だけを切り離して、その姿の感じから、自分勝手に娘だらうときめてゐるだけのことだつた。でもそれには、彼がそ

の娘を不思議な見方であまりに見つめ過ぎた結果、彼自らの感傷が多分に加はつてのことかもしれない。

もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから會ひに行く女をなまなましく覺えてゐる、はつきり思ひ出さうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の感觸で今も濡れてゐて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのやうだと、不思議に思ひながら、鼻につけて匂ひを嗅いでみたりしてゐたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはつきり浮き出たのだつた。彼は驚いて聲をあげさうになつた。しかしそれは彼が心を遠くへやつてゐたからのことで、氣がついてみればなんでもない、向側の座席の女が寫つたのだつた。外は夕闇がおりてゐるし、汽車のなかは明りがついてゐる。それで窓ガラスが鏡になる。けれども、スチイムの溫みでガラスがすつかり水蒸氣に濡れてゐるから、指で拭くまでその鏡はなかつたのだつた。

娘の片眼だけは反つて異樣に美しかつたものの、島村は顏を窓に寄せると、夕景色見たさといふ風な旅愁顏を俄づくりして、掌でガラスをこすつた。

娘は胸をこころもち傾けて、前に横たはつた男を一心に見下してゐた。肩に力が入つてゐるところから、少しいかつい眼も瞬きさへしないほどの眞劍さのしるしだと知れた。男は窓の方を枕にして、娘の横へ折り曲げた足をあげてゐた。三等車である。島村の眞横ではなく、一つ前の向側の座席だつたから、横寢してゐる男の顏は耳のあたりまでしか鏡に寫らなかつた。

娘は島村とちやうど斜めに向ひ合つてゐることになるので、ぢかにだつて見られるのだが、彼女等が汽車に乘り込んだ時、なにか涼しく刺すやうな娘の美しさに驚いて目を伏せる途端、娘の手を固くつかんだ男の青黃色い手が見えたものだから、島村は二度とそつちを向いては惡いやうな氣がしてゐたのだつた。

鏡の中の男の顏色は、ただもう娘の胸のあたりを見てゐるゆゑに安らかだといふ風に落ちついてゐた。弱い體力が弱いながらに甘い調和を漂はせてゐた。襟卷を枕に敷き、それを鼻の下にひつかけて口をぴつたり覆ひ、それからまた上になつた頰を包んで、一種の頰かむりのやうな工合だが、ゆるんで來たり、鼻にかぶさつて來たりする。男が目を動かすか動かさぬうちに、娘はやさしい手つきで直してやつてゐた。見てゐる島村がいら立つて來るほど幾度もその同じことを、二人は無心に繰り返してゐた。また、男の足をつつんだ外套の裾が時々開いて垂れ下る。それも娘は直ぐ氣がついて直してやつてゐた。これらがまことに自然であつた。このやうにして距離といふものを忘れながら、二人は果しなく遠くへ行くものの姿のやうに思はれたほどだつた。それゆゑ島村は悲しみを見てゐるといふつらさはなくて、夢のからくりを眺めてゐるやうな思ひだつた。不思議な鏡のなかのことだつたからでもあらう。

鏡の底には夕景色が流れてゐて、つまり寫るものと寫す鏡とが、映畫の二重寫しのやうに動くのだつた。登場人物と背景とはなんのかかはりもないのだつた。しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合ひながらこの世ならぬ象徵の世界を描いてゐた。殊に娘の顏のただなかに野山のともし火がともつた時には、島村はなんともいへぬ美しさに胸が顫へたほどだつた。

遙かの山の空はまだ夕燒の名殘の色がほのかだつたから、窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までものの形が消えてはゐなかつた。しかし色はもう失はれてしまつてゐて、どこまで行つても平凡な野山の姿が尙更平凡に見え、なにものも際立つて注意を惹きやうがないゆゑに、反つてなにかぼうつと大きい感情の流れであつた。無論それは娘の顏をそのなかに浮べてゐたからである。姿が寫る部分だけは窓の外が見えないけれども、娘の輪郭のまはりを絕えず夕景色が動いてゐるので、娘の顏も透明のやうに感じられた。しかしほん

たうに透明かどうかは、顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通るかのやうに錯覺されて、見極める時がつかめないのだつた。

汽車のなかもさほど明るくはなし、普通の鏡のやうに強くはなかつた。反射がなかつた。だから、島村は見入つてゐるうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまつて、夕景色の流れのなかに娘が浮んでゐるやうに思はれて來た。

さういふ時彼女の顔のなかにともし火がともつたのだつた。この鏡の映像は窓の外のともし火を消す強さはなかつた。ともし火も映像を消しはしなかつた。さうしてともし火は彼女の顔のなかを流れて通るのだつた。しかし彼女の顔を光り輝かせるやうなことはしなかつた。冷たく遠い光であつた。小さい瞳のまはりをぼうつと明るくしながら、つまり娘の眼と火とが重なつた瞬間、彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ、妖しく美しい夜光蟲であつた。

こんな風に見られてゐることを、葉子は氣づくはずがなかつた。彼女はただ病人に心を奪はれてゐたが、たとへ島村の方へ振り向いたところで、窓ガラスに寫る自分の姿は見えず、窓の外を眺める男など目にも止まらなかつただらう。

島村が葉子を長い間盗見しながら、彼女に惡いといふことを忘れてゐたのは、夕景色の鏡の非現實な力にとらへられてゐたからだつたらう。

だから彼女が驛長に呼びかけて、ここでもなにか眞劍過ぎるものを見せた時にも、物語めいた興味が先きに立つたのかもしれない。

その信號所を通るところは、もう窓はただ闇であつた。向うに風景の流れが消えると、鏡の魅力も失はれてしまつた。葉子の美しい顔はやはり寫つてゐたけれども、その溫かいしぐさにかかはらず、島村は彼女のうちになにか澄んだ冷たさを新しく見つけて、鏡の曇つて來るのを拭はうともしなかつた。

ところがそれから半時間ばかり後に、葉子達も思ひがけなく島村と同じ驛に下りたので、彼はまたなにか起るかと自分にかかはりがあるかのやうに振り返つたが、プラット・フオウムの寒さに觸れると、急に汽車のなかの非禮が恥しくなつて、後も見ずに機關車の前を渡つた。

男が葉子の肩につかまつて線路へ下りようとした時に、こちらから驛員が手を上げて止めた。

やがて闇から現はれて來た長い貨物列車が二人の姿を隱した。

宿屋の客引きの番頭はちやうど火事場の消防のやうにものものしい雪裝束だつた。耳をつつみ、ゴムの長靴をはいてゐた。待合室の窓から線路の方を眺めて立つてゐる女も、青いマントを着て、その頭巾をかぶつてゐた。

島村は汽車のなかのぬくみがさめなくて、そとのほんたうの寒さをまだ感じなかつたけれども、雪國の冬は初めてだから、土地の人のいでたちに先づおびやかされた。

「そんな恰好をするほど寒いのかね。」

「へい、もうすつかり冬支度です。雪の後でお天氣になる前の晩は、特別冷えます。今夜はこれでもう氷點を下つてをりますでせうね。」

「これが氷點以下かね。」と、島村は軒端の可愛い氷柱を眺めながら、宿の番頭と自動車に乘つた。雪の色で家々の低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底に沈んでゐるやうだつた。

「なるほどなににさはつても冷たさがちがふよ。」

「去年は氷點下二十何度といふのが一番でした。」

「雪は？」

「さあ、普通七八尺ですけれど、多い時は一丈を二三尺超えてますでせうね。」

「これからだね。」

「これからですよ。この雪はこの間一尺ばかり降つたのが、だいぶ解けて來たところです。」

「解けることもあるのかね。」

「もういつ大雪になるか分りません。」

十二月の初めであつた。

島村はしつつこい風邪心地でつまつてゐた鼻が、頭のしんまですつといちどきに通つ

て、よごれものが洗ひ落されるやうに、水洟がしきりと落ちて來た。

「お師匠さんとこの娘はまだゐるかい。」

「へえ、をりますをります。驛にをりましたが、御覽になりませんでしたか、濃い青いマントを着て。」

「あれがさうだつたの？——後で呼べるだらう。」

「今夜ですか。」

「今夜だ。」

「今の終列車でお師匠さんの息子が歸るとか言つて、迎へに出てゐましたよ。」

夕景色の鏡のなかで葉子にいたはられてゐた病人は、島村が會ひに來た女の家の息子だつたのだ。

さうと知ると、自分の胸のなかをなにかが通り過ぎたやうに感じたけれども、このめぐりあはせを、彼はさほど不思議と思ふことはなかつた。不思議と思はぬ自分を不思議と思つたくらゐのものであつた。

指で覺えてゐる女と眼にともし火をつけてゐた女との間に、なにがあるのかなにが起るのか、島村はなぜかそれが心のどこかで見えるやうな氣持もする。まだ夕景色の鏡から醒め切らぬせゐだらうか。あの夕景色の流れは、さては時の流れの象徵であつたかと、彼はふとそんなことを呟いた。

スキイの季節前の溫泉宿は最も客の少い時で、島村が內湯から上つて來ると、もう全く寢靜まつてゐた。古びた廊下は彼の踏む度にガラス戶を微かに鳴らした。その長いはづれの帳場の曲り角に、裾を冷え冷えと黑光りの板の上へ擴げて、女が高く立つてゐた。

たうとう藝者に出たのであらうかと、その裾を見てはつとしたけれども、こちらへ歩いて來るでもない、體のどこかを崩して迎へるしなを作るでもない、じつと動かぬその立ち姿から、彼は遠目にも眞面目なものを受け取つて、急いで行つたが、女の傍に立つて默つてゐた。女も濃い白粉の顏で微笑まうとすると、反つて泣き面になつたので、なにも言はず二人は部屋の方へ歩き出した。

あんなことがあつたのに、手紙も出さず、會ひにも來ず、踊の型の本など送るといふ約束も果さず、女からすれば笑つて忘れられたとしか思へないだらうから、先づ島村の方から詫びかいひわけを言はねばならない順序だつたが、顏を見ないで歩いてゐるうちにも、彼女は彼を責めるどころか、體いつぱいになつかしさを感じてゐることが知れるので、彼は尙更、どんなことを言つたにしても、その言葉は自分の方が不眞面目だといふ響きしか持たぬだらうと思つて、なにか彼女に氣押される甘い喜びにつつまれてゐたが、階段の下まで來ると、

「こいつが一番よく君を覺えてゐたよ。」と、人差指だけ伸した左手の握拳を、いきなり女の目の前に突きつけた。

「さう？」と、女は彼の指を握るとそのまま離さないで手をひくやうに階段を上つて行つた。

火燵の前で手を離すと、彼女はさつと首まで赤くなつて、それをごまかすためにあわてて彼の手を拾ひながら、

「これが覺えてゐてくれたの？」

「右ぢやない、こつちだよ。」と、女の掌の間から右の手を拔いて火燵に入れると、改めて左の握拳を出した。彼女はすました顏で、

「ええ、分つてるわ。」

ふふと含み笑ひしながら、島村の掌を擴げて、その上に顏を押しあてた。

「これが覺えてゐてくれたの？」

「ほう冷たい。こんな冷たい髮の毛初めてだ。」

「東京はまだ雪が降らないの？」

「君はあの時、ああ言つてたけれども、あれはやつぱり嘘だよ。さうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いところへ來るものか。」

あの時は——雪崩の危險期が過ぎて、新綠の登山季節に入つた頃だつた。

あけびの新芽も間もなく食膳に見られなくなる。

無爲徒食の島村は自然と自身に對する眞面目さも失ひがちなので、それを呼び戻すには山がいいと、よく一人で山歩きをするが、その夜も國境の山々から七日振りで溫泉場へ下

りて來ると、藝者を呼んでくれと言つた。ところが、その日は道路普請の落成祝ひで、村の繭倉兼芝居小屋を宴會場に使つたほどの賑かさだから、十二三人の藝者では手が足りなくて、たうてい貰へないだらうが、師匠の家の娘なら宴會を手傳ひに行つたにしろ、踊を二つ三つ見せただけで歸るから、もしかしたら來てくれるかも知れないとのことだつた。島村が聞き返すと、三味線と踊の師匠の家にゐる娘は藝者といふわけではないが、大きい宴會などには時たま頼まれて行くこともある、半玉がなく、立つて踊りたがらない年增が多いから、娘は重寶がられてゐる、宿屋の客の座敷へなど滅多に一人で出ないけれども、全くの素人とも言へない、ざつとこんな風な女中の説明だつた。

怪しい話だとたかをくくつてゐたが、一時間ほどして女が女中に連れられて來ると、島村はおやと居住ひを直した。直ぐ立ち上つて行かうとする女中の袖を女がとらへて、またそこに坐らせた。

女の印象は不思議なくらゐ清潔であつた。足指の裏の窪みまできれいであらうと思はれた。山々の初夏を見て來た自分の眼のせゐかと、島村は疑つたほどだつた。

着つけにどこか藝者風なところがあつたが、無論裾はひきずつてゐないし、やはらかい單衣をむしろきちんと着てゐる方であつた。帶だけは不似合に高價なものらしく、それが反つてなにかいたましく見えた。

山の話などはじめたのをしほに、女中が立つて行つたけれども、女はこの村から眺められる山々の名もろくに知らず、島村は酒を飲む氣にもなれないでゐると、女はやはり生れはこの雪國、東京でお酌をしてゐるうちに受け出され、ゆくすゑ日本踊の師匠として身を立てさせてもらふつもりでゐたところ、一年半ばかりで旦那が死んだと、思ひの外素直に話した。しかしその人に死別れてから今日までのことが、恐らく彼女のほんたうの身の上話かもしれないが、それは急に打ち明けさうもなかつた。十九だと言つた。嘘でないなら、この十九が二十一二に見えることに島村ははじめてくつろぎを見つけ出して、歌舞伎の話などしかけると、女は彼よりも俳優の藝風や消息に精通してゐた。さういふ話相手に飢ゑてゐてか、夢中でしやべつてゐるうち、根が花柳界出の女らしいうちとけやうを示して來た。男の氣心を一通り知つてゐるやうでもあつた。それにしても彼は頭から相手を素人ときめてゐるし、一週間ばかり人間とろくに口をきいたこともない後だから、人なつかしさが溫かく溢れて、女に先づ友情のやうなものを感じた。山の感傷が女の上にまで尾をひいて來た。

女は翌日の午後、お湯道具を廊下の外に置いて、彼の部屋へ遊びに寄つた。

彼女が坐るか坐らないうちに、彼は突然藝者を世話してくれと言つた。

「世話するつて？」

「分つてるぢやないか。」

「いやあねえ。私そんなこと頼まれるとは夢にも思つて來ませんでしたわ。」と、女はぷいと窓へ立つて行つて國境の山々を眺めたが、そのうちに頰を染めて、

「ここにはそんな人ありませんわよ。」

「嘘をつけ。」

「ほんたうよ。」と、くるつと向き直つて、窓に腰をおろすと、

「强制することは絶對にありませんわ。みんな藝者さんの自由なんですわ。宿屋でもさういふ世話は一切しないの。ほんたうなのよ、これ。あなたが誰か呼んで直接話してごらんになるといいわ。」

「君から頼んでみてくれよ。」

「私がどうしてそんなことしなければならないの？」

「友だちだと思つてるんだ。友だちにしときたいから、君は口説かないんだよ。」

「それがお友達つてものなの？」と、女はつい誘はれて子供つぽく言つたが、後はまた吐き出すやうに、

「えらいと思ふわ。よくそんなことが私にお頼めになれますわ。」

「なんでもないことぢやないか。山で丈夫になつて來たんだよ。頭がさつぱりしないんだ。君とだつて、からつとした氣持で話が出

來やしない。」
　女は瞼を落して默つた。島村はかうなればもう男の厚かましさをさらけ出してゐるだけなのに、それを物分りよくうなづく習はしが女の身にしみてゐるのだらう。その伏目は濃い睫毛のせゐか、ほうつと溫かく艶めくと島村が眺めてゐるうちに、女の顏はほんの少し左右に搖れて、また薄赤らんだ。
「お好きなのをお呼びなさい。」
「それを君に聞いてるんぢやないか。初めての土地だから、誰がきれいだか分らんさ。」
「きれいつて言つたつて。」
「若いのがいいね。若い方がなにかにつけてまちがひが少いだらう。うるさくしやべらんのがいい。ぼんやりしてゐて、よどれてないのが。しやべりたい時は君としやべるよ。」
「私はもう來ませんわ。」
「馬鹿言へ。」
「あら。來ないわよ。なにしに來るの？」
「君とさつぱりつきあひたいから、君を口說かないんぢやないか。」
「あきれるわ。」
「さういふことがもしあつたら、明日はもう君の顏を見るのもいやになるかもしれん。話に氣乘りするなんてことがなくなるよ。山から里へ出て來て、せつかく人なつこいんだからね、君は口說かないんだ。だつて、僕は旅行者ぢやないか。」
「ええ。ほんたうね。」
「さうだよ。君にしたつて、君が厭だと思ふ女となら、後で曾ふのも胸が惡いだらうが、自分が選んでやつた女ならまだましだらう。」
「知らないつ。」と、强く投げつけてそつぽを向いたものの、
「それはさうだけれど。」
「なにしたらおしまひさ。味氣ないよ。長續きしないだらう。」
「さう。ほんたうにみんなさうだわ。私の生れは港なの。ここは溫泉場でせう。」と、女は思ひがけなく素直な調子で、
「お客はたいてい旅の人なんですもの。私なんかまだ子供ですけれど、いろんな人の話を聞いてみても、なんとなく好きで、その時は好きだとも言はなかつた人の方が、いつまでもなつかしいのね。忘れないのね。別れた後つてさうらしいわ。向うでも思ひ出して、手紙をくれたりするのは、たいていさういふんですわ。」
　女は窓から立ち上ると、今度は窓の下の壘に柔かく坐つた。遠い日々を振り返るやうに見えながら、急に島村の身邊に坐つたといふ顏になつた。
　女の聲にあまり實感が溢れてゐるので、島村は苦もなく女を騙したかと、反つてうしろめたいほどだつた。
　しかし彼は嘘を言つたわけではなかつた。女はとにかく素人である。彼の女ほしさは、この女にそれを求めるまでもなく、罪のない手輕さですむことだつた。彼女は清潔過ぎた。一目見た時から、これと彼女とは別にしてゐた。
　それに彼は夏の避暑地を選び迷つてゐる時だつたので、この溫泉村へ家族づれで來ようかと思つた。さうすれば女はさいはひ素人だから、細君にもいい遊び相手になつてもらへて、退屈まぎれに踊の一つも習へるだらう。本氣にさう考へてゐた。女に友情のやうなものを感じたといつても、彼はその程度の淺瀨を渡つてゐたのだつた。
　無論ここにも島村の夕景色の鏡はあつたであらう。今の身の上が曖昧な女の後腐れを嫌ふばかりでなく、夕暮の汽車の窓ガラスに寫る女の顏のやうに、非現實的な見方をしてゐたのかもしれない。
　彼の西洋舞踊趣味にしてもさうだつた。島村は東京の下町育ちなので、子供の時から歌舞伎芝居になじんでゐたが、學生の頃は好みが踊や所作事に片寄つて來て、さうなると一通りのことを究めぬと氣のすまないたちゆゑ、古い記錄を漁つたり、家元を訪ね歩いたりして、やがては日本踊の新人とも知り合ひ、研究や批評めいた文章まで書くやうになつた。さうして日本踊の傳統の眠りにも新しい試みのひとりよがりにも、當然なまなましい不滿を覺えて、もうこの上は自分が實際運動のなかへ身を投じて行くほかないといふ氣持に狩り立てられ、日本踊の若手からも誘ひ

かけられた時に、彼はふいと西洋舞踊に鞍替へしてしまつた。日本踊は全く見ぬやうになつた。その代りに西洋舞踊の書物と寫眞を集め、ポスタアやプログラムの類まで苦勞して外國から手に入れた。異國と未知とへの好奇心ばかりでは決してなかつた。ここに新しく見つけた喜びは、目のあたり西洋人の踊を見ることが出來ないといふところにあつた。その證據に島村は日本人の西洋舞踊は見向きもしないのだつた。西洋の印刷物を賴りに西洋舞踊について書くほど安樂なことはなかつた。見ない舞踊などこの世ならぬ話である。これほど机上の空論はなく、天國の詩である。研究とは名づけても勝手氣儘な想像で、舞踊家の生きた肉體が踊る藝術を鑑賞するのではなく、西洋の言葉や寫眞から浮ぶ彼自身の空想が踊る幻影を鑑賞してゐるのだつた。見ぬ戀にあこがれるやうなものである。しかも、時々西洋舞踊の紹介など書くので文筆家の端くれに數へられ、それを自ら冷笑しながら職業のない彼の心休めとなることもあるのだつた。

さういふ彼の踊の話が、女を彼に親しませる助けとなつたのは、その知識が久し振りで現實に役立つたともいふべきありさまだつたけれども、やはり島村は知らず識らずのうちに、女を西洋舞踊扱ひにしてゐたのかもしれない。

だから、自分の淡い旅愁じみた言葉が、女の生活の急所に觸れたらしいのを見ると、女を騙したかとうしろめたいぐらゐだつたが、

「さうしておけば、今度僕が家族を連れて來たつて、君と氣持よく遊べるさ。」

「ええ、そのことはもうよく分りましたわ。」と、女は聲を沈めて微笑むと、少し藝者風にはしやいで、

「私もそんなのが大好き、あつさりしたのが長續きするわ。」

「だから呼んでくれよ。」

「今？」

「うん。」

「驚きますわ。こんな眞晝間になんにもおつしやれないでせう？」

「屑が殘るといやだよ。」

「あんたそんなこと言ふの、この土地を荒稼ぎの溫泉場と考へちがひしていらつしやるのよ。村の樣子を見ただけでも分らないかしら。」と、女はいかにも心外らしく眞劍な口振りで、ここにはさういふ女のゐないことを繰り返して力說した。島村が疑ふと、女はむきになつて、しかし一歩讓つて、それはどうしようと藝者の勝手だけれども、ただ、うちへことわらずに泊れば藝者の責任で、どうならうとかまつてはくれないが、うちへことわつとけば抱主の責任で、どこまでも後を見てくれる、それだけのちがひだと言ふ。

「責任てなんだ。」

「子供が出來たり、體が惡くなつたりすることですわ。」

島村は自分の頓馬な質問に苦笑ひしながら、そのやうにのんきな話も、この山の村にはあるかも知れないと思つた。

無爲徒食の彼は自然と保護色を求める心あつてか、旅先の土地の人氣には本能的に敏感だが、山から下りて來ると直ぐこの里のいかにもつましい眺めのうちに、のどかなものを受け取つて、宿で聞いてみると、果してこの雪國でも最も暮しの樂な村の一つだとのことだつた。つい近年鐵道の通じるまでは、主に農家の人々の湯治場だつたといふ。藝者のゐる家は料理屋とかしるこ屋とか色褪せた暖簾をかけてゐるが、古風な障子のすすけたのを見ると、これで客があるのやら、そして日用雜貨の店や駄菓子屋にも、抱へをたつた一人置いてゐるのがあつて、その主人達は店のほかに田畑で働くらしかつた。師匠の家の娘だからではあらうが、鑑札のない娘がたまに宴會などの手傳ひに出ても、咎め立てる藝者がないのだらう。

「それでどのくらゐゐるの。」

「藝者さん？　十二三人かしら。」

「なんていふ人がいいの？」と、島村が立ち上つてベルを押すと、

「私は歸りますわね？」

「君が歸つちゃ駄目だよ。」

「厭なの。」と、女は屈辱を振り拂ふやうに、

「歸りますわ。いいのよ、なんとも思やしま

せんわ。また來ますわ。」
しかし女中を見ると、なにげなく坐り直した。女中が誰を呼ばうかと幾度聞いても、女は名指しをしなかつた。
ところが間もなく來た十七八の藝者を一目見るなり、島村の山から里へ出た時の女ほしさは味氣なく消えてしまつた。肌の底黑い腕がまだ骨張つてゐて、どこか初々しく人がよささうだから、つとめて興醒めた顏をすまいと藝者の方を向いてゐたが、實は彼女のうしろの窓の新綠の山々が目についてならなかつた。ものを言ふのも氣だるくなつた。いかにも山里の藝者だつた。島村がむつつりしてゐるので、女は氣をきかせたつもりらしく默つて立ち上つて行つてしまふと、一層座が白けて、それでもう一時間くらゐは經つただらうから、なんとか藝者を歸す工夫はないかと考へるうちに、電報爲替の來てゐたことを思ひ出したので郵便局の時間にかこつけて、藝者といつしよに部屋を出た。
しかし、島村は宿の玄關で若葉の匂ひの强い裏山を見上げると、それに誘はれるやうに荒つぽく登つて行つた。
なにがをかしいのか、一人で笑ひが止まらなかつた。
ほどよく疲れたところで、くるつと振り向きざま浴衣の尻からげして、一散に駈け下りて來ると、足もとから黃蝶が二羽飛び立つた。
蝶はもつれ合ひながら、やがて國境の山より高く、黃色が白くなつてゆくにつれて、遙かだつた。
「どうなすつたの。」
女が杉林の陰に立つてゐた。
「うれしさうに笑つてらつしやるわよ。」
「止めたよ。」と、島村はまたわけのない笑ひがこみ上げて來て、
「止めた。」
「さう？」
女はふいとあちらを向くと、杉林のなかへゆつくり入つた。彼は默つてついて行つた。
神社であつた。苔のついた狛犬の傍の平な岩に女は腰をおろした。
「ここが一等涼しいの。眞夏でも冷たい風がありますわ。」
「ここの藝者つて、みなあんなのかね。」
「似たやうなものでせう。年增にはきれいな人がありますわ。」と、うつ向いて素氣なく言つた。その首に杉林の小暗い靑が映るやうだつた。
島村は杉の梢を見上げた。
「もういいよ。體の力がいつぺんに拔けちやつて、をかしいやうだよ。」
その杉は岩にうしろ手を突いて胸まで反らないと目の屆かぬ高さ、しかも實に一直線に幹が立ち並び、暗い葉が空をふさいでゐるので、しいんと靜けさが鳴つてゐた。島村が背を寄せてゐる幹は、なかでも最も年古りたものだつたが、どうしてか北側の枝だけが上までずつかり枯れて、その落ち殘つた根元は尖つた杭を逆立ちに幹へ植ゑ連ねたと見え、なにか恐しい神の武器のやうであつた。
「僕は思ひちがひしてたんだな。君を初めて山から下りて來て見たもんだから、ここの藝者はきれいなんだらうと、うつかり考へてたらしい。」と、笑ひながら、七日間の山の健康を簡單に洗濯しようと思ひついたのも、實は初めにこの淸潔な女を見たからだつたらうかと、島村は今になつて氣がついた。
西日に光る遠い川を女はじつと眺めてゐた。手持無沙汰になつた。
「あら忘れてたわ。お煙草でせう。」と、女はつとめて氣輕に、
「さつきお部屋へ戻つてみたら、もういらつしやらないんでせう。どうなすつたかしらと思ふと、えらい勢ひでお一人山へ登つてらつしやるんですもの。窓から見えたの。をかしかつたわ。お煙草を忘れていらしたらしいから、持つて來てあげたんですわ。」
そして彼の煙草を袂から出すと、マツチをつけた。
「あの子に氣の毒したよ。」
「そんなこと、お客さんの隨意ぢやないの、いつ歸さうと。」
石の多い川の音が圓い甘さで聞えて來るばかりだつた。杉の間から向うの山襞の陰るのが見えた。

「君とさう見劣りしない女でないと、後で君と會つた時心外ぢやないか。」

「知らないわ。負け惜みの強い方ね。」と、女はむつと嚼るやうに言つたけれども、藝者を呼ぶ前とは全く別な感情が二人の間に通つてゐた。

はじめからただこの女がほしいだけだ、それを例によつて遠廻りしてゐるのだと、島村ははつきり知ると、自分が厭になる一方女がよけい美しく見えて來た。杉林の陰で彼を呼んでからの女は、なにかすつと拔けたやうに涼しい姿だつた。

細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭のやうに伸び縮みがなめらかで、默つてゐる時も動いてゐるかのやうな感じだから、もし皺があつたり色が惡かつたりすると、不潔に見えるはずだが、さうではなく濡れ光つてゐた。目尻が上りも下りもせず、わざと眞直ぐに描いたやうな眼はどこかをかしいやうながら、短い毛の生えつまつた下り氣味の眉が、それをほどよくつつんでゐた。少し中高の圓顏はまあ平凡な輪郭だが、白い陶器に薄紅を刷いたやうな皮膚で、首のつけ根もまだ肉づいてゐないから、美人といふよりもなによりも、清潔だつた。

お酌に出たこともある女にしては、こころもち鳩胸だつた。

「ほら、いつの間にかこんなに蚋が寄つて來ましたわ。」と、女は裾を拂つて立ち上つた。

このまま靜けさのなかにゐては、もう二人の顏が所在なげに白けて來るばかりだつた。

そしてその夜の十時頃だつたらうか。女が廊下から大聲に島村の名を呼んで、ばたりと投げ込まれたやうに彼の部屋へ入つて來た。いきなり机に倒れかかると、その上のものを醉つた手つきでつかみ散らして、ごくごく水を飲んだ。

この冬スキイ場でなじみになつた男達が夕方山を越えて來たのに出會ひ、誘はれるまま宿屋に寄ると、藝者を呼んで大騷ぎとなつて、飲まされてしまつたとのことだつた。

頭をふらふらさせながら、一人でとりとめなくしやべり立ててから、

「惡いから行つて來るわね。どうしたかと搜してるわ。後でまた來るわね。」と、よろけ出て行つた。

一時間ほどすると、また長い廊下にみだれた足音で、あちこちに突きあたつたり倒れたりして來るらしく、

「島村さあん、島村さあん。」と、甲高く叫んだ。

「ああ、見えない。島村さあん。」

それはもうまぎれもなく女の裸の心が自分の男を呼ぶ聲であつた。島村は思ひがけなかつた。しかし宿屋中に響き渡るにちがひない金切聲だつたから、當惑して立ち上ると、女は障子紙に指をつつこんで棧をつかみ、そのまま島村の體へぐらりと倒れた。

「ああ、ゐたわね。」

女は彼ともつれて坐つて、もたれかかつた。

「醉つてやしないよ。うゐん、醉つてるもんか。苦しい。苦しいだけなのよ。性根は確かだよ。ああつ、水飲みたい。ウイスキイとちやんぽんに飲んだのがいけなかつたの。あいつ頭へ來る、痛い。あの人達安壜を買つて來たのよ。それ知らないで。」などと言つて、掌でしきりに顏をこすつてゐた。

外の雨の音が俄に激しくなつた。

少しでも腕をゆるめると、女はぐたりとした。女の髮が彼の頰で押しつぶれるほどに首をかかへてゐるので手は懷に入つてゐた。

彼がもとめる言葉には答へないで、女は兩腕を閂のやうに組んでもとめられたものの上をおさへたが、醉ひしびれて力が入らないのか、

「なんだ、こんなもの。畜生。畜生。だるいよ。こんなもの。」と、いきなり自分の肘にかぶりついた。

彼が驚いて離させると、深い齒形がついてゐた。

しかし、女はもう彼の掌にまかせて、そのまま落書をはじめた。好きな人の名を書いて見せると言つて、芝居や映畫の役者の名前を二三十も並べてから、今度は島村とばかり無數に書き續けた。

島村の掌のありがたいふくらみはだんだん